

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

17 鷺田清一「つながり」と「ぬくもり」

●出典 鷺田清一『感覚の幽い風景』【104/W2/4】（北野高校図書館）

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

■目標 問いかけの実例を、自らの中に確認しながら読む。

■追跡

① 電車のなかで半数以上のひとが、だれに眼を向けるでもなく、うつむいて携帯電話をチェックし、指を器用に動かしてメールを打つシーンに、もうだれも驚かなくなった。だれかと「つながってほしい」と痛いくらいにおもうひとたちが、たがいに別の世界の住人であるかのように無関心で隣りあっている光景が、わたしたちの前には広がっている。

今は、スマホ。今や、半数以上、どころではない。

「だれかと「つながってほしい」と痛いくらいにおもうひとたち」の中に自分も入っているか。自問しつつ読んでいこう。

この車内の無関心さを、社会学では「儀礼的無関心 (civil inattention)」と呼ぶ。

② いつごろからか、十代のひとたちが「キレル」という言葉を口にしはじめた。「腹が立つ」でももちろんなく、「アタマにくる」でも「むかつく」でもなく、「キレル」。苛立ちの隠喩はついに身体から切り離された？

「キレル」も一般化した。「むかつく」を初めて聞いたときは、「保健室行くか？」と尋ねたものだったが、まだ身体の状態を使った表現だったのだ。「キレル」は、たしかに、どこか切れたわけではないのだから、隠喩（メタファ）だ。

③ このように、「つながってほしい」という想いが一方にあり、「切れる」という行動が他方にある。ひとはどうして、そこまで接続／遮断に拘泥するようになったのか。まるでそれが〈いのち〉のスイッチのオン／オフであるかのように……。

「切れる」という表現を無意識に使い、それがあある感覚の表現としてびったりくる感じが共有されているとするなら、その言葉（隠喩）ともとの言葉の意味には、何かつながりがあるはずだ。「切れる」と言いたい衝動の裏には、つながってほしいという衝動が、作用反作用のようにくっついていてのではないか——筆者はその洞察を、「ひとは接続／遮断に拘泥（こうでい）している」にこだわるようになった」といいあらわしている。

断に拘泥（こうでい）している」にこだわるのか。

どうして、つながってる／切れている、にこだわるのか。

「〈いのち〉のスイッチのオン／オフ」という表現には、つながってないと、〈いのち〉が不安定になる、という意味合いが響いている。〈いのち〉と、かっこつきであることにはどういう意味があるのだろうか？

④ だれかとつながってほしいというのは、じぶんがそのひとに思いをはせるだけでなく、そのひともまたいまじぶんのことを思ってくれているという、**読解問題1**そういう関係のなかに浸っていたいということだ。

読解問題1「そういう関係」とは、どのような関係か。

この問題って——？ 直前以外に何があるんやろ？って思うよね。僕も思う。それでいいんじゃない？ なんやろ、この問題。謎。

【解答例】じぶんがそのひとに思いをはせるだけでなく、そのひともまたいまじぶんのことを思ってくれているという関係。

相思相愛の関係の中に浸っていたい。そりや、だれもがそう思う。別に恋愛じゃなくても。でもリア充でありつづけるわけにはいかないから、みんなネットをのぞき込んでいるのではないか？

⑤ 寂しいから、とひとは言う。だが、寂しいのは、じぶんがここにいるという感覚がじぶんがここにいるという事実の確認だけでは足りないからだ。ひとがもつとも強くじぶんの存在をじぶんで感じることができるとは、褒められるのであれ貶されるのであれ、愛されるのであれ憎まれるのであれ、まぎれもない他者の意識の宛先としてじぶんを感じることでできるときだろう。「ムシられる」（無視される）ことでひとが深い傷を負うのは、じぶんの存在がまるでないかのよう扱われるからであり、じぶんのこの存在がないことを望まれていると感じるから、そういう否定の感情に襲われるからだ。だれからも望まれない生存ほど苦しいものはない。老幼を問わず。

鷺田さんが繰り返し説く論理。自分が今ここにいるという安定した感覚は、どこかで他者の意識が自分に向いていることに支えられている。興味深いのは、それがたとえ、否定的な意識であっても、存在を意識してくれている他者がいることが、自分の存在を支える、という点だ。

どうだろう？ わが身のこととして、想像してみよう。都市の中では、だれも見知らぬ人であり、自分のことなど、だれも見えていない。東京でも外国でもどこでもいい、誰も知り合いのいない街。家族はみんな亡くなってしまった。天涯孤独。そんな状況。

または、名目上の家族はある、クラスメイトもいる。しかし、だれも自分の存在など気にしていない。きょうもだれひとり、自分に声をかけるどころか、まなざしを向けることもなかった。そんな日々が続いているという状況――。

「だれかが私を見てくれている」。この「だれか」としての究極的な存在は、〈神〉だ。すべてを失っても、〈神〉は私を見ている。無人島に流れ着いたロビンソン・クルーソーは、夜空の星の向こうに神を見て、自分がここに耐えたわけだ。

⑥ 唐突におもわれるかもしれないが、近代の都市生活というのは寂しいものだ。「近代化」というかたちで、ひとびとは社会のさまざまなくびき、「封建的」といわれたくびきから身をもぎはなして、じぶんがだれであるかをじぶんで証明できる、あるいは証明しなければならぬ社会をつくりあげてきた。すくなくとも理念としては、身分にも家業にも親族関係にも階級にも性にも民族にも囚われない「自由な個人」によって構成される社会をめざして、である。「自由な個人」とは、彼／彼女が帰属する社会的なコンテクストから自由な個人ということだ。そして都市への大量の人口流入とともに、それら血縁とか地縁といった生活上のコンテクストがしだいに弱体化し、家族生活も夫婦を中心とする核家族が基本となって世代のコンテクストが崩れていった。さらに社会のメディア化も急速に進行し、そうして個人はその神経をじかに「社会」というものに接続させるような社会になっていった。いわゆる**読解問題2**中間世界というものが消失して、個人は「社会」のなかに漂流するようになった。

この段落も、〈近代社会における個人〉というテーマがコンパクトに説明されている。熟読・理解しておこう。日本の近代化の例で考えるとわかりやすいかもしれない。江戸時代、人々は〈身分〉や〈土地〉に縛られていた。明治になり、武士も商売をなくてはならなくなる。都市の産業が盛んになると、農村から次男三男が都市へ出てくる。自由だけど、寂しい個人が大量に生まれる。

「血縁とか地縁といった生活上のコンテクストがしだいに弱体化」「核家族が基本となって世代のコンテクストが崩れていく」というのは、どういうことか。

血縁・地縁は、農村・漁村・山村などに典型的な、生きていくための近所ネットワークである。そのコンテクスト・ネットワーク・つながりが、薄れていく。都会の中でも、田舎でのネットワークに似たものを、住民たちが構成している時代もあった。〈昭和〉のイメージで語られるような、隣組があり、商店街があり、ご隠居さんがいて、駐在さんがいて、校長先生のおうちがあつて、だいたい名前を知つていて……といった街のたたずま

いには、今から見れば、なんとなく家族的な生活圏が感じられる。

「世代のコンテクスト」とは、おじいさん、おばあさんがいて、父・母、子どもといった、サザエさんの家的な、大家族のつながりのことだ。

今、それはどうなっているか。

高層マンションがあり、暗証番号を知らない者は入れない。一つ上に住む人の名も知らない。コンビニのアルバイトの店員さんは、行く時間によって違うし、そもそも同じ人なのかどうか、意識したこともない。社会というのはどうも、あるらしい。テレビをつければ、何かやっつるし、ニュースも流れている。スマホを開ければ、ツイッターで誰かが何かを流している。隣の人は知らないけれど、フォローしている見たこともないやつらのは知つている。

「社会のメディア化」というのは、社会という、ほんとは直接見聞きすることができないぼんやりした概念を、個人とつなぐための媒体が、近代になってどんどん発達した、ということだ。新聞に始まつて、ラジオ、テレビ、これらを通じて、個人はどこか遠くの出来事を直接知り、そこらへんに〈社会〉があるんやなあ、と想像する。きわめつけは、ネット。ネットになると、もはや国境を越え、全地球的世界と直接つながっている気分もたらず。個人――世界が、ショートカットで結ばれる。

読解問題2「中間世界」とは、どのような世界か。

「中間世界というものが消失した」と同じ文型は、「血縁とか地縁といった生活上のコンテクストがしだいに弱体化した」、「核家族が基本となって世代のコンテクストが崩れた」の二つ。よつて、「中間世界というもの」とは、具体的には「血縁とか地縁」「家族」である。「コンテクスト」は、文脈、状況、と脚注があるが、文脈とは、文と文、語と語をつなぐ、その間に流れているある種の力のことだ。「中間世界」はなんと何の中間かという、個人と社会。その二つをつなぐ働きをしているのが「中間世界」だ。これらをまとめて、

【解答例】血縁や地縁、家族など、人々が作る生活圏や世代と世代の間を包み込み、個人と社会をつないでいた世界。

⑦ 社会的なコンテクストから自由な個人とは、裏返していえば、みづからコンテクストを選択しつづ自己を構成する個人ということである。じぶんがだれであるかをみづから決定もしくは証明しなければならぬということである。言論の自由、職業の自由、婚姻の自由というスローガンがそのことを表している。けれども、そういう「自由な個人」が群れ集う都市生活は、いわゆるシステム化というかたちで大規模に、緻密に組織されてゆかざるをえず、そして個人はそのなかに緊密に組み込まれてしか個人としての生存を維持で

きなくなっている。つまり、じぶんを選択しているつもりでじつは社会のほうから選択されているとかたちでしかじぶんを意識できないのだ。社会のなかにじぶんが意味のある場所を占めるということが、社会にとっての意味であってじぶんにとっての意味ではないらしいという感覚のなかでしか確認できなくなっているのだ。／そこでひとは「じぶんの存在」を、すこし急いで、わたしをわたしとして名ざしする他者との関係のなかに求めるようになる。すでに述べたことだが、わたしの存在は他者の意識の宛先となっているというかたちで、もっともくつきり見えてくるものだからだ。こうして私的な、あるいは親密な個人的関係というものに、ひとはそれぞれの「わたし」を賭けることになる。近代の都市生活とは、個人にとっては、社会的なもののリアリティがますます親密なものの圏内に縮められてゆく、そういう過程でもあるのだ。

抽象度が高い。★具体的化しつつ、読み解いていくこと。自分の身にも起きていくこととして。

あなたは誰？ 私は高校生です。そういえるためには、高校入試に受からなければならぬ。医者です、といえるためには、医師国家試験に受からなければならぬ。それは、あなたが選んだの？ ……ほんとは塾の先生に言われて、とか、親に言われて、とか、言う場合は少なくない。そのとき親や先生は、社会の代わりとして、そういつているのだ。

社会は、例えばテストで点を取る能力によって、あなたを選択する。君は医者になっていいが、あなたはダメだ、社会は、そういう。社会は、学校や企業や試験システムの顔をして、あなたの前に現れる。会社に入る。あなたは「人材」だ。会社はあなたの「適性」に応じて、あなたを配置する。あなたは、社会の中に位置づけられ、自分が会社にとって意味のある仕事をする存在であることに、自分の存在意義を見つける。しかし、あなたより「適性」の優れた新入社員が現れる。あなたは配置転換される。あなたはそのとき、「社会のなかにじぶんが意味のある場所を占めるということ」は、社会にとっての意味であってじぶんにとつての意味ではない」ことに気づく。

あなたは、何々課の何々係としての自分ではなく、「私を（ほんとの）私として、その名前を呼んでくれる他者」を求める。「親密な個人的関係」しか、自分を支えてくれるものはない。そう感じる。

それは、近代以前の自動的に何かに属している（私）（私）、という意識も近代ほど強くないと想像されるが）や、中間世界（中間集団）に包まれている（私）とは異なる。大規模に、緻密に組織されている現代の社会システムの中で、（私）は自分の居場所を、「親密な個人的関係」に求めざるを得ない。

⑧ 現代の都市生活者の存在感情の底にあまねく静かに浸透してきているようにおもわれる「寂しさ」、それが、いま、だれかと「つながってほしい」というひりひりとした疼きとなって現象しているのではないだろうか。ケータイはその意味できわめて現代的なツ

ルだ。だれかとの関係のなかで傷つく痛みの方が、身体のフィジカルな痛みよりも、よほどリアルだという、そういう（魂）の光景が、そこに映しだされているようにおも

どうだろうか。ここも、自分に問いかけて理解してみる箇所だ。だれかと「つながってほしい」という思いが、「ひりひりとした疼き」と表現されているのはなぜか。

つながってほしいとメールをしても、返信があるとは限らない。ラインに既読がつくと限らない。既読がついたのに、何の反応もないなら、自分は「無視」された痛みをひりひりと感じなければならぬ。「つながってほしい」という思いは、痛みをもたらすのだ。しかし、痛みを伴っても、それでも、ラインせざるを得ない衝動が突き上げてくる。ひりひりとうずくつながり願望が、自分の現実感をつなぎ止める。

⑨ そのなかでひとがおそらく最初に求めるのは、じぶんが、あるいはその存在が「肯定されて」あるという感情だろう。

だれでもいいから、おれを肯定してくれ。肯定を求めて、群れ動く現代人の顔。人間の拠って立つ原初に、肯定感が必要だというのは、絶対的な真実である。生まれてきてくれて、ありがとう。あなたがここにいてくれてうれしい。そういうまなざしと声に包まれて、私たちは育つ。母親のまなざしの届く範囲にいる赤ちゃんは、そうでない時に比べて、冒険的な行為をためらわない、という実験結果がある。見てもらっているという意識が、勇気を生み、人間は未知の世界へも挑む。

胎内↓親や家族のまなざし↓共同体（集落、村、近所の人々）のまなざし、というように、前近代と呼ばれる世界では、内側から育っていく肯定感の中で生が営まれていた。しかし近代、そして、現在、私たちが住んでいる世界は、条件付きの「肯定」、人材としての「肯定」に満ちている。親までが、能力のあるあなたなら愛するけれど、と条件をつける。それはもはや肯定ではなく、評価にすぎない。社会は、私を評価する。

しかし、評価でもなんでもいい、なげなしの「肯定」のかけらを求めて、私たちは、努力する。なぜならそれがないと、自分の生の拠って立つ場所が失われるから。

⑩ 緊密に、そして大規模にシステム化された社会というのは、「資格」が問われる社会である。ひとびとの生活の細部まで支えているシステムを維持するために――食べるとい、生きるうえでもっとも基礎的でないとなみですら、飼育・栽培、製造・調理、流通・販売の複雑なシステムにそっくり組み込まれてしか成り立たなくなっているのが現代の生活だ――、それにふさわしい行動の能力が求められる。システムが複雑化するというのは、そういう行動能力の育成に複雑なプロセスが要するということでもある。つまり、教育課程が長くなるということ。今日では幼稚園に通う前から教育は始まり、そこから最低でも十数年教育は続く。

システムといっているのは、端的には資本主義システムのことである。私たちの社会では、資本主義を回すために、あらゆる領域がシステムに従属している。教育システムもまたその一つ。

「資格」というのは、何ができるかという意味の資格である。それをする資格がある。それをする能力がある。

「おれのやるとおりにしろ」といわれ、見よう見まねで種のまき方を学ぶ。父がやったように子もやれば、食べるものは得られる。そういう素朴な共同体での学びとは、比べものにならないほど、私たちは、長い期間をかけているいろいろなことを学ぶ。その子どもが大人になるとき、システムがどんなふうにより複雑化しているか、見通しがきかない世界になっているからだ。

また、ここでいう「能力」とは、資本主義システムの回転に役立つ能力のことである。だから、別に人工知能にその能力を発揮してもらっても、システムとしては何の問題もない。日本人であろうが、外国人であろうが、ロボットであろうが、関係ない。

⑩ 「資格」が問われるというのは、もしこれができれば、次にこれができる……ということだ。そこでは何をやるにしても条件が問われる。そして条件を満たしていなければ「不要」の烙印を押される。「あなたの存在は必要ない。」と。だから、じぶんの子どもが将来こういうみじめなことにならないように、親たちはずいぶん幼いころから教育を受けさせる。「これをちゃんとやったらこんどの日曜日に遊園地に連れて行ってあげますからね。」から「こんな点数をとるのはおれの子じゃない。」まで、いろんな脅迫の言葉を向けながら、だ。「もしくできれば」という条件の下で、じぶんの存在が認められたり認められなかったりするという経験を、子どもはこうしてくりかえしてゆくことになる。じぶんの存在はひとに認められるか認められないかで、あったりなかったりする、そういうものなのだ、という感情を募らせてゆくのだ。これを言いかえれば、じぶんというものに「なる」途上にいる子どもたちにとっては、じぶんが「いる」に値するものであるか否かの問いを、ほとんどポジティブな答えがないままに、恒常的にじぶんに向けるようになるということである。じぶんというものの「死」にそれとははつきり意識しないままにふれつつけるということである。

最後の「じぶんの死にふれつつける」の前で立ち止まってほしい。どういうことか、説明できるだろうか。

勉強ができれば、私の子と認めよう。できなければ、私の子とは認めない。そこまで極端ではなくても、成績がよければ笑顔、悪ければ叱られる、ということなら、多くの人が経験しているだろう。生きていく力のない子どもにとって、親の機嫌は、生死に係る、といえれば大げさかもしれないが、ごはんのグレードには影響するだろう。

自分は親に愛してもらっているか、という意識は、自分がここにいていいか、という問に接している。愛してもらっていない、という感じは、自分はここにいてはいけないのではないか、というおそれを感じます。自分が親から見放されるかもしれないという予感、——はつきり意識することは恐ろしいので抑圧されてはいるけれど——自分の死の予感に接触してしまう。

⑫ このような鬱屈した気分のなかで、子どもたちは何もできなくてもじぶんの存在をそれとして受け容れてくれるような、そういう愛情にひどく渇くようになるのだろう。つまり、なんの条件もつけないで「このままの」じぶんを認めてくれる他者の存在に渇くということだ。「できない」子どもだけではない。「できる」子どもも、あるいは「できる」子どものほうが言ったほうがいいかもしれないが、上手に「条件」を満たさなかに、もしこれを満たせなかったらという不安を感じ、かつそれを（かろうじて？）上手に克服しているじぶんを「偽の」じぶんとして否定する、**読解問題3** そういう感情を内に深く抱え込んでいくはずだ。

読解問題3 そういう感情とは、どのような感情か。

指示内容なので、まずは直前を使って。

（原案）——余計な語を削って整える。

【解答例1】（愛情をかけてもらうための）条件を満たそうとすると、もし条件を満たせなかったらという不安を感じ、かつそれをなんとか満たしているように装っているじぶんを偽のじぶんとして否定しようとする感情。

原文がAかつBなので、それでもいいが、ただ並んでいるだけの感じもする。もう少し見つめ直してみると、

・努力しつつも、もしできなかったら、という不安を感じる。

（ので）

・努力し、条件を満たす。

（が、しかし）

・努力している自分を（にせものだと）否定する。

という道筋になっている。しかし、否定はゴールじゃない。否定しつつ、不安だから、やはり努力してしまう。ループになっている。すると、ここにある感情は、不安だから努力することと努力している自分を否定することの間で揺れ動く心理だと押さえる方が落ち着きがいい。

【解答例2】愛情をかけてもらうための条件を満たせないかもしれないという不安と、条件をなんとか満たしているように装っている自分への否定が入り混じる感情。

【解答例3】愛情をかけてもらうための条件を満たせないかもしれないという不安から、条件をなんとか満たそうと努力するが、一方、そう装っている自分への否定も入り混じる感情。

こういう感情は、あるとき反抗となつて表面化する。もういい子であることはやめたで。かといって、無条件の愛をくれ、なんて、いえるものか。抑圧が、ネガティブな感情になつて暴れ出す。

⑬ だから、子どもたちや十代のひとたちは、じぶんをじぶんとして「このままで」肯定してくれる友だちや恋人を、これまでのどの時代よりも強く求めるようになっていらい。だれかと「つながっていたい」という言葉もそこから出てきているようにおもわれてならない。じぶんを肯定できるかどうか、そのことじつに大きな不安を感じているのが、いまの子どもたちではないか。大人たちが別の文脈から「つながり」の大切さを言うときには、いまの子どもたちの「つながっていたい」という気持ちの裏面にはこうした他者との遮断の認識が深くあることを見逃してはならないようにおもう。

まとめてみよう。

自分を肯定するには、他者からの無条件の肯定が必要だ。しかし、現代社会では、親も含め、条件付きの肯定しか与えてくれない。だから、自分で自分を肯定することにも、不安が伴う。そのため、若い人たちは、自分を無条件で肯定してくれる存在を、強く求めるようになっていく。

——たとえそれが、バーチャルなキャラであつても。

■ 読解問題

- 1 「そういう関係」とは、どのような関係か。
- 2 「中間世界」とは、どのような世界か。
- 3 そういう感情とは、どのような感情か。

■ 発展問題 本文の論旨を自分の経験と照らし合わせて、どう考えるか、論ぜよ。その際、最終段落にあった「大人たちが別の文脈から「つながり」の大切さを言う」という点についても触れよ。

● 重要語 「能力主義」 Ⅱ 辞書的には「肩書き、性別、年齢などではなく、個々の能力によってその人の価値が評価されるべきである、という考え方。成果主義と同義に用いられることもある」。産業の観点からは、正しいように見える。何にも仕事ができないのに、

身分が高いというだけで生活も保障され、威張つていられた封建社会との対比でいえば、能力が正しく評価されることはよいことだ。しかし、むしろ現在の（というより、本質的な）問題は、能力主義が人間の生の基盤を掘り崩しているありさまだ。無能な者は、生きている値打ちがない。そういう空気の恐ろしさである。（その一方、無能な権力者が、不正義の限りを尽くしている迷妄も続いている。）